
白いオオカミと、クリスマスの贈り物

聖華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白いオオカミと、クリスマスの贈り物

【Zコード】

N1302J

【作者名】

聖華

【あらすじ】

それはクリスマスイブの夜のこと。

一人ぼっちの女の子の元に、真っ白なオオカミが現れました。
オオカミは女の子に頼み事をします。

はたして、女の子は無事にオオカミの頼み事を果たせるのでしょうか？

それは、とある冬の日のことでした。

その日は朝からお店が活氣付いていて、人々も朝から忙しそうに動き回っていました。

広場の大きなモミの木は綺麗なガラス玉でおめかしをして、家の扉では松ぼっくりや赤いリボンがついたクリスマス・リースが久々の出番に張り切っています。

今日はクリスマスイブ。冬の日の中でも一番特別で幸せな、そんな日です。

家族や友達と一緒に暖かな暖炉の前で愉快な時間を過ごす、そんな日です。

子供たちが赤い服に白い髪のサンタクロースを楽しみに待つ、そんな日です。

でも、そんな楽しい日にも、悲しい人は居るのです。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

その日の夜の、とある小さな家。

周りの家は明かりと暖かさに満ち溢れているといふのに、その家は暗く冷たくなつていて、どことなく寂しそう。いや、寂しそうなのではなくて、本当に寂しいのかもしれません。少なくとも、そこに住んでいる女の子は、そうでした。

女の子は真っ暗な部屋の中で一人っきり、窓の外を見つめていました

た。

窓の近くは部屋の中より寒くて、女の子はぶるりと身震いをします。でも、それでもそこから動いたとは思いません。だって、窓の外を見ていたのですから。

窓の外には暖かそうな明かりと、照らされてキラキラと輝く真っ白な雪がありました。

ポタリ。雪が落ちました。冷たいです。
でも、女の子は気にはせず外を見ます。そこには、女の子の近くにはないものがあつたからです。
暖かさも、明かりも、キラキラも、ここにはありません。

女の子はいつも一人。お父さんもお母さんも兄弟も犬も猫も居ません。あるのは家だけです。
だから特別な日も、もちろん一人。ごちそうも、プレゼントも、笑う声も、ありません。

隣の家の人はそのことを知っていたようだ、ついさっき女の子をパーティに誘いました。でも、女の子は断りました。
女の子も、本当は断りたくなかつたのです。皆で楽しく遊びましたかつたのです。

なんで断つたのか、女の子にも分かりません。でも、いつもそうしてきただから、それが正しいのです。

とんとんとん、とんとんとん。

誰かが何かを呟きました。女の子は窓の外から離しません。

離したら、そんなことはないけれど、その風景すらどこかに行ってしまう

しまいそうな気がしました。

それを見ていると、そんなことではないけれど、その風景の中に自分

がいるような気がしました。

「じんばんは、お嬢さん」

女の子は急に後ろからそんな声が聞こえてきたので、とても驚きました。

それから、名残惜しいけれど、窓の外とやつなりをして、それを見ます。

それまで、部屋の中は真っ暗でした。でも、女の子が振り返ると真っ暗はなくて、代わりに淡い光がありました。

一匹、白いオオカミが居て、その毛並みが優しく輝いていたのです。オオカミの金色の眼はとても穏やかで、女の子は一目でこのオオカミが好きになりました。

「夜分遅くに申し訳ないね。驚かせてしまったかな?」

オオカミの声は不思議な声で、若によつた若くないような、女人のような男の人のような、高いような低いような、とにかくそんな声でした。

でも、その声はとても柔らかく、女の子は精一杯の敬意を示そうと

「いいえ、そんなことはありませんわ」

ちょっとじぎこちなく、大人たちが偉い人に使っていた話し方をしてみました。

オオカミはそんな女の子に微笑みかけます。でも、顔を見ただけでは微笑んだとは分かりません。

オオカミは人間とは違つて、心で微笑んでいるからです。

もちろん、女の子にはそれが分かりました。だつて、それが普通なのですから。

「どうやら君はとても賢い子のようだね。でも、私にはいつもと同じように喋ればいいのだよ」

「はい。分かりました」

女の子は素直に話し方を元に戻しました。そして、少しホッとします。

だつて、大人の喋り方なんてあまりしたことがないので、いつもより考えながら話さないといけませんし、間違った言い方をしてしまつても分からないうちです。

「実はね、今日は君に頼みがあつて来たんだ。私の話を聞いてくれるかい？」

「もちろんです」

「ありがとうございます、君は優しい子でもあるようだね。君はサンタクロースを知っているかな？」

「えーっと……はい」

そんな風にちょっとと口ごもりつつ女の子は答えます。でも、女の子だつてサンタクロースがどんな人かなんて、すぐに分かりました。口ごもつたのは女の子がもうプレゼントはちょっと変わっていたからでした。

だから、皆がサンタクロースのくれたプレゼントについて話していると、いつもそれがサンタクロースからのものなのか、不安に思うのです。

女の子の置いたくつしたにはプレゼントが入っていることはなかつたけれど、代わりにとても素敵な夢が用意されていたのです。

「私はそのサンタクロースと同じような仕事をしているんだ。君にはその仕事を手伝つてもらいたくてね」

「どんな仕事なんですか？」

「クリスマスイブの夜、皆が寝る頃になると皆に楽しい夢を届けるんだ。特別な日の夜には、怖い夢や悲しい夢は似合わないからね」

女の子は（やつぱり、あれはサンタクロースからじゃなかつたんだ）と思いました。

でも、悲しくはありませんでした。こんな素敵なお手伝いをする子は、この村では女の子しか居ないと思つて、ちょっと誇らしげな気分になつたからです。

オオカミは何も言わず、穏やかに女の子を見つめます。女の子は、オオカミが自分の答えを待つてゐるのだと気付きました。

「わたし、お手伝いします！　なにをすればいいかは、分からぬけど……」

「大丈夫、それは私が教えるからね。さあ、行こう。外は寒いから、ちゃんと準備をしておいで。私は外で待つてゐるから」

オオカミは立ち上がると、明かりと共に扉の方へ歩いていきます。女の子は急いでクローゼットから、暖かいコートとブーツ、フワフワの耳当てとマフラー、それから手袋を取り出しました。全部身につけると、あつたかくなりました。でも、女の子の心の中はもつとあつたかくなっていました。

これから、どんなことが起るのでしょうか？ それがとても楽し
みだつからです。

女の子が外に出ると、その横を風がぴゅーっと笛のような音を立て
て、通り過ぎてこきました。

でも、女の子はそんなの気にしませんでした。

田の前に居るオオカミは淡く光っているので、白い雪の中でもはつ
きつと見えて、とても綺麗でした。

オオカミは女の子の前にゆっくり歩み寄ると、言いました。

「では、今から仕事について説明します。これから君には逃げてし
まつた夢を捕まえてもらいたいんだ」

「夢を？」

「ああ。逃げてしまつた夢は子供にしか捕まることが出来ないん
だ。まあ、私の背中に乗つて」

女の子はオオカミの背にまたがります。オオカミは大きかったので
すが、ちゃんと女の子が乗りやすいように伏してくれました。
オオカミの毛はとてもさらさらしていて、光っているためかほんの
りと暖かく感じます。

「じっかり、私に掴まつておくれだよ」

女の子がオオカミの首に手を回すと、オオカミは走り出します。
周りの景色が後ろに後ろに飛んでいきます。女の子は少し怖くなつ
て、オオカミの暖かい毛の中に顔をうずめました。

やがて、女の子が顔を上げると、先程とは違つ景色が広がっていました。

周りには黒いカーテンが引かれていて、カーテンにはムーンストーンやルビー、パールなど様々な宝石がちりばめられています。女の子はそーっと下を覗いてみました。いつもは女の子の何倍も大きな家々が、今はおもちゃのお家のよう見えます。そして、そんな光景を見ていると、自分が絵本や童話の主人公になつた気がして、楽しい気分になりました。

「ほら、見て」「うう。あそこには居るのが夢だよ」

女の子がオオカミと同じ方向に田を向けると、そこにはモミの木がある広場でした。

ガラス玉がキラキラと輝いているのが、空からでも分かります。そして、そのモミの木の下に、一人、女の子より小さな子供が居ました。

膝を抱え込んで座つていて、顔はよく見えません。

「あれが夢なの？」

「そうだよ。夢は人によつてその姿が変わつて見えるんだ」

オオカミはそう言つと、ゆっくりと広場へと降り出しました。何故空を歩けるのか女の子は不思議に思いましたが、このオオカミは特別だからということで納得しました。

サクッ。オオカミの足が雪の上につきました。

女の子は体を起し、ピョンとオオカミの背中から飛び降りました。

暖かいオオカミの毛から離れたせいか、少しだけより寒く感じます。

「いいかい？ 夢を捕まえるには、夢を説得しなくてはいけないんだ」

「でも、わたしに説得なんてできるかな？」

「大丈夫、君なら出来るよ。勇気を持つていれば、夢はそれに答えてくれるからね」

オオカミは鼻の先で、つんつと女の子のほっぺを押します。

その感触はあつたかくて、女の子は勇気が出るのを感じました。

女の子は夢に歩み出します。夢が、ゆっくりと顔を上げました。

「ねえ、夢さん。あなたはびひつて逃げ出したの？」

「…………」

夢は答えませんでした。女の子は困ったな、と思いながらも話しかけます。

「あのね、この街のみんなはあなたが来るのを楽しみにしてるの。だから

「そんなの、嘘だよ」

「えつ？」

女の子は夢の言葉に驚きます。夢がなにかを言つたのも、その内容にも。

自分の言つたことを嘘だと言われるなんて、女の子は思いもしなかつたのです。だって、それが正しいと思っていたのですから。

「特別な日だから夢がいるなんて嘘。特別な日には特別な日の楽しみがある。ケーキや、パーティや、プレゼント その楽しみの中じゃ、夢なんてちっぽけで、忘れられてしまうもの。だから、逃げたんだ。夢は夢で、一人で居ればいいんだよ」

夢は悲しげに、また顔を抱え込んだ膝の中につづめました。
それを見た女の子は、その光景が何かにとても似てると思いました。
でも、何かは分かりません。
女の子は息を一つ吸います。冷たく澄んでいました。

そして

「そんなこと、言つたら駄目だよ！」

大きな声で叫びました。夢は驚いたようで、顔をがばっと上げました。

「そんなこと、ないよ。だって、わたしは夢を楽しみにしてるんだもの。もし、わたしにケーキや、パーティや、プレゼントがあつたとしても、それは同じだよ。そんな風に思う人も居るかもしけないけど、わたしみたいに夢を楽しみにしてる人も絶対いる。自分のことを楽しみに待ってる人が居るなら、その人のところへ行かなくちゃ！ そうでしょう？ 一人は悲しいし、寂しいし、その方がどっちのためにもいいよ」

女の子は真剣に素直に、自分が思つたことを言いました。
ボタリ。いつのまにか零が落ちていきました。でも、それはさつきとは違つて、暖かく感じました。

その夢を「ホールの袖で拭つて、女の子は夢に手を差し出しました。

「行け、みんなが待つよ」

夢はしづらく差し出された手を見ていました。そして、手を伸ばして、女の子の手に重ねました。

途端に不思議なことが起きました。夢の体が輝くと、やがて綺麗な光の粒になつて、消えてしまったのです。
そして、女の子の耳元で、こんな声がしました。

「ありがと」

それは心からの「ありがと」でした。

「ああ、帰りへ。ここは寒いからね」

「夢は、どつなつたの？」

すぐ近くにオオカミと、その暖かさがやつてくれると、女の子は尋ねました。

お礼は言われたけれど、夢がどつなつたのかは、女の子には分からなかつたのです。

するとオオカミはまた、優しい微笑みを浮かべてくれました。

「夢は一足先に嘘のところに行つたのだよ。君は夢をきちんと説得できたんだ。早く行かないと夢に先を越されてしまうよ。せつかく君の家に行ったのに君が居なかつたら、夢はきつと悲しい思いを

してしまつからね」

女の子はせつときと回じよつにオオカミにまたがります。一回田なので、せつせよりはちよつぴり上手に乗れた気がしました。
もしかしたら、違う理由もあるのかもしけないけれど、それは女の子には分かりませんでした。

オオカミは空を駆けます。月がオオカミと女の子の道案内をするよう^うに、田の前に浮かんでいました。

「わたし、悪い子なのかな?」

ポツリ。女の子は呟きました。

オオカミは優しい声をかけてくれます。

「どうして、そう思うんだい?」

「だって、わたしにはサンタクロースが来てくれないから。夢は来てくれたことがあるけど……」

女の子はモジモジ言いました。自分は悪い子だと言ひのせ、ちよつと考へて言つと、恥ずかしかったのです。

そんな女の子を、オオカミは笑いました。でも、それは決して悪い笑いではありません。

それは大人们が子供に「そんなことで、悩まなくていいんだよ」と言つ時のような、優しい笑いでした。

「君は良い子だよ。私が言うんから、間違いない。君は私を
や、私だけではなく、夢やみんなを助けてくれたんだからね」

柔らかな声、暖かな毛、ちょっとした疲れ。いつもは寝て いる時間に、その三つが合わさったせいか、女の子は急に眠くなつて、オオカミに返事できませんでした。

オオカミの首に手を回したまま、その暖かさを感じながら、とうとうまたを閉じてしましました。

最後に、女の子はこんな言葉を聞きました。

「それに、もう君のところにはサンタクロースがやってきているからね」

女の子が目を開けると、すぐ前に窓がありました。

窓からは冬の穏やかで少し弱弱しい日差しが入つてきていたので、
女の子は田をパチクリさせなければいけませんでした。

ポタリ。窓の外で雪が落ちます。キラツとして、綺麗です。

女の子はボーッとした頭で、夜のことを思い出します。

空を歩く白いオオカミや、その暖かな毛の感触、それから自分が夢を説得できしたこと。あれは全部、夢だったのでしょうか……？

ふと、女の子は膝の上に暖かさを感じました。

女の子が下を見ると、真っ白なオオカミのヌイグルミがちょこっと座っていました。

その眼は金色で、持ち上げるとほんのりと暖かく感じます。あの優しいオオカミを思い出します。

（こんなヌイグルミ、持つてたかな？）と女の子は不思議に思いました。

そして、そのヌイグルミを抱きしめると（でも、あれが夢だったとしても、いいや）と思いました。

だって、あの出来事は女の子にひとつは、例え現実じゃなくとも、とても特別なものだつたのですから。

とんとんとん、とんとんとん。

誰かが何かを叩きました。女の子は椅子から立ち上がり、扉の方に駆け寄り、開けました。

扉の外には隣の家の男の子が立っていました。いつものように、何故かは分からぬけど、少し照れたような顔をしています。

「おはよう。えーっと、実は今日もぼくの家でパーティがあるんだけど……どうかな？」

男の子はちよつとギヤギヤして言います。昨日誘った時には、女の子は悲しそうな顔をして、首を横に振ったからです。

でも、今日は違いました。

女の子は笑つて、しきり答えました。昨日は断るまでにも色々考えたけれど、今は考えませんでした。

「うふー。」

(後書き)

あなたの元にも、クリスマスの贈り物が届きますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1302j/>

白いオオカミと、クリスマスの贈り物

2010年10月15日23時38分発行